

---

# 魔法少女リリカルなのはVenom - そのための刃 -

たくやんか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはV e n o m - するための刃 -

### 【Nコード】

N 0 7 2 9 S

### 【作者名】

たくやんか

### 【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはS t r i k e r sの二次創作です。

このお話のコンセプトは、『矛盾』です。

ハイ。

今なら無料でテイクオフできます。

こちらへどうぞー。

最初に……

『魔法少女リリカルなのはV e n o m』<sup>ヴェノム</sup>は、原作リリカルなのはの歴史にオリジナルキャラクターのV e n o m<sup>ヴェノム</sup>を加えて、紡ぎだした10年間余りの架空の歴史の話です。

本編の主人公ヴェノムが活躍する本筋は巻数と、オープニングに『それは……』から始まる語りが付きます。

それ以外のヴェノムの他のキャラクターにスポットを当てるスピノフでは語りが付きません。

以上を踏まえて、よろしければお読み下さい。

\*

高町なのはが小学6年生の時の事だ。

本人達がある少女とすったもんだしている時に、世界単位で転移魔法を使った連中がいた。

その魔法は大幅に失敗したものの、ちゃっかりと”地球”の”日本”から3人の人間を何処とも知れない管理外世界へとほうり出した。

一人は、26歳の男性。

一人は、9歳の女の子。

一人は、6歳の男の子。

9歳の女の子がほつり出されたのは、戦地だった。

人同士が互いの信念を用いて、争う現場。

死なないために、知恵を振り絞り、身体を張って、生き抜く女の子。

彼女に魔力と言えるような力はほとんど無い。

傍らにたった一つの刃。

よりどころをその刃として、女の子は戦いの日々を過ごす事となる。

年月が経つと、彼女と似たような子供達も増え、女の子はその子らと家族のように生きるのだが。

ある日にハンドガンタイプのデバイスを所有する魔導士により、せっかく出来た家族を殺されてしまう。

体制への反抗。ハンドガンの魔導士を捜し当てる事を目的とした彼女は、テロリストグループの一員となり、活動を開始する。

そんなおりである。

彼女が、トウーハンド（両効きの銃使い）の『ティアナ・ランスタ  
ー』と対峙するのは……。

そして、彼女……『日野七緒』と『ティアナ・ランスタール』の因縁  
が始まる。

## 第礼刃・因縁の行方（前書き）

「今日のものを生産するため、昨日のものがいつも殺されている」

・アーレント・

## 第礼刃・因縁の行方

何処までも続く、砂の支配する世界。

昼は灼熱。

夜は極寒。

生物が生きるには、専用の進化や特化を遂げなくてはならなくて、環境に適応するには、やはりそれなりの代償が必要というところ。

その砂だらけの地帯で、一角、鉱物と降下物が突き刺ささっている場所がある。

遠巻きから見ると、それは砂に生えた金属の樹木に見えた。

金属で出来た森林地帯。異様な雰囲気を漂わせるその地帯は、とてもではないが、人が寄り付きそうにはなかった。

が、例外も存在するようで、砂嵐なんかが吹くと、分かりづらくなるが、確かにそこには人がいた。

激しく動き回っているようで、影くらいしか捉えられないが、確かにいる。

凝視すると、見えるシルエット。人の形をしている。

人間が二人。

そこにいた。

しかも、二人は仲良くはしてない。仲悪く、争っていた。

そうだ。

戦闘の真つ最中のようだ。

重低音や金属音がガインガキンなどと鳴り響いている。  
一撃一撃が力の籠る本気の一撃だ。

これを喰らっては立てまい。

それを防ぐ人影は、短い魔力刃を2対、携えていた。相手の斬撃が止むと、即座に拳銃型へと切り替え、射撃を撃ち込む。

さらにそれをかわす人影は、一瞬の静止の後に宙へと飛び出し、砂に刺さった金属類を足場にして、立体的な攪乱戦法を取る。

バツタというか、ウサギというか、瞬発力と躍動感に溢れた動きは、酷く捉えづらかった。

「くっ……!!」

声を発すると、それがきっかけのように会話がなされる。

「ティアナ・ランスタアアアー!!!!」

飛び交う人影は、攪乱戦法の後に、大振りな刃を奮う。

それを魔力刃で防ぐ人物は、周囲から発生する幾つものスフィアから魔力弾を放っていた。



「ナナオー！あんだ、あたし一人を狙うために、随分大袈裟な事をするわね！」

双銃を構えしは、ティアナ・ランスター。

元機動六課、スターズの一員。現執務官である彼女はある長期の任務に携わっていた。

相対するは、ナナオ・ヒノ。日本語で、『日野七緒』。転移魔法によって、次元世界にやってきた、本人が望まぬ運命を辿る女性。さる因縁の元に、ティアナを付け狙っていた。

小走りに、徐々に速く、ナナオは駆け出す。

ティアナの双銃に比肩するが如く、双剣を所持する彼女は間合いに入ると、一足飛びに跳躍し、右手に持っている得物を真上から振り下ろした。

ティアナは、その斬撃を双銃を交差させる事で防いだが、重たい衝撃に膝を微かに折った。

ナナオは、浚にもう片方の左手に持つ得物を同じ箇所叩きつける。

「ぐっ！」

衝撃がもう一つ重ねられる事で、ティアナの両膝が折れた。

（やっぱり、重たい。こいつの攻撃）

ナナオの持つ得物は、鳥のクチバシのように湾曲している。クク

り刀や鉞のように、重さで叩き割る事を目的とする……

「ストライクナイフ！」

通常の物よりやや大きめのストライクナイフと呼ばれる代物。

ティアナの動きを静止させるのに十分な攻撃をしたナナオは、着地寸前に身を翻し、横薙ぎに刃を走らせる。独楽こまのように、クルリと回転する斬撃を受け止めさせて、ナナオは尚も攻撃を続ける。脱力から全力。

気を抜けば、体を持っていかれる斬撃にティアナは耐える。

「くそっ！反撃する暇が、ないっ！」

この守り一辺倒の展開に更なる追い撃ちが待つ。

ガードが開いた。

則ち、無防備。

「マーカッー！！」

『Gravitation』

ナナオの右手のストライクナイフが下から跳ね上がるように、空を裂いてくる。

ティアナは、その斬撃を上体を反らしてかわすが、体の中心点に黒い渦のようなものを打ち付けられた。

「しまった！」

ナナオは、斬り上げる勢いを利用して跳躍する。空を駆け上がるかのようなその跳躍は、金属柱まで上昇し、そこで回転し、金属柱から跳ね返ってくるかのような動きを見せる。

速いが、単調。

読みやすい動きのため、相手の行動を予測すれば楽々と避わせる動きだ。

が、

ティアナに先程打ち付けられた黒い渦は、ナナオに引き付けられるように移動していく。次いでは、ティアナの体も引っ張られるようにナナオの方へ向かっていく。

「覚悟しろ。ナナの本気の一斬だ」

ナナオの空中からの斬撃は、黒い渦に引き付けられるように加速する。

ティアナは避けようがないと直感し、ナナオの一斬をシールドでもって、防ぐ。

ぶつかり合う瞬間、聞く者の耳を破るかのような高音が鳴る。

油断すれば、即、切り裂かれる斬撃を展開したシールドで防ぎきる。

「ちいい……！」

ナナオは、悔しげに刃を振り戻し、軽く後方へ跳んで、間合いを

取った。

（危なかった。けど、今ので大分魔力を消費しちゃったわ）

ティアナに付いていた黒い渦は消えていた。

グラビティマーカー。

ナナオの両刃から放たれる、その黒い渦は付着した後に、渦を中心とした引力を発生させる。

渦を引き寄せる。

渦に引き付けられる。

この要素を有機物無機物関係なしに付着させられるナナオがよく使う魔法の一つだ。

ティアナは止まらず、横に移動しながら、双銃に魔力を込める。今の攻防で、疲労を感じたが、休んでいては状況は変わらない。悪化する可能性もある。

「ナナオ。いい加減こっちからも行かせてもらっわ」

バレットを次から次に連発する。時折、鉄鋼弾を交える。相手の防御を崩させるために。

速い速度の弾丸。

なかなか反応しづらい。

双刃でナナオは片端から叩き落とす。落とせない弾は喰らわないように避ける。機動性が売りの一つでもあるナナオにとって、たった一発分のダメージでも窮地に落ちかねないからだ。

ティアナは、弾数を増やすためにスフィアを自分の周囲に浮遊させ始める。

多数の敵を相手どる時に、使用されよう魔法。

複数弾丸の誘導制御。

「クロスファイアー、ガトリングショット!!」

複数弾丸を一斉発射させた。

ナナオに無数の弾丸が迫りくる。

「ハッ。ティアナ・ランスター。この程度でナナを落とせるとは思わないでよ」

ストライクナイフを背中側臀部にあるホルダーにしまつと、両手を指開く。

両手にはめられている手甲、ガントレットから魔力が湧き出る。

『Repulsion』

ナナオが、その手を魔力弾丸にかざすと、弾丸の軌道は明後日の方向へ飛んでいく。次々にかざし、次々と軌道が変わる。

「嘘っ！」

ティアナが、驚愕する。無数の複数弾丸は、その役目を遂げる事なく、無力化していった。

斥力。

レプルシオン・マーカー。ガントレットから放たれる印を対象に当てると、有機物無機物問わず、引き離す……もしくはナナオ自身を引きはがす。

砲撃ではなく、魔力を弾丸状に圧縮するティアナのバレットはナオにとってやりやすい魔法だ。

そして、ナナオが双刃使いだとしても、”遠距離攻撃”が無いわけではない。

「ランウェイ！」

『G O ! t o ! M a t e r i a l 』

ザツと地面の砂を……鉱物混じりの砂を手づかみで掴むと、ナナオはそれを宙にほうり投げた。

同時にガントレットの斥力を発生。

結果、斥力により跳ね飛ばされた砂の固まりが紙やすりのように研ぎ澄まされ、ティアナを襲った。

触れたものを削り取りながら進むサンドペーパーを横移動で避ける。

「危ないじゃない！」

ティアナ劣勢。

しかし、対抗策有り。

ティアナは気付かれないように、そつと左手に銃とは別の得物を手にした。

「バレット！」

多数の弾丸をティアナが放ち、ナナオはティアナの狙いに気付かない。

刹那、ティアナの手から離れた物体は、ナナオの認識の外からサクリと突き刺さった。

それは、苦無。

忍者の使用する棒状刃物の一つ。  
ただ通常のものとは違う。

- ・先端分の刃が全体の4分の1
- ・2分の1の部分に魔法陣の描かれたクリスタルケース
- ・柄の部分に緑色の宝石と緑の布

目標物体に刺さった後に、柄の宝石が、クリスタルケースに押し込まれ、反応し、魔導効果を生む物。

魔力が無い者でも魔法効果を出せる代物だ。

ティアナは、それを隠すようにして、ひそかに投げた。

「痛っ！」

ジンとした痛みに気付き、ナナオがふとももを見ると、ティアナ

の投げた苦無が刺さっている。

傷というには、随分と軽く、魔力弾丸と違い、機動性を損なう心配もない位だが、ナナオは嫌な予感を感じる。

「クロスファイアー、シフトシュート！」

ティアナが、再び複数弾丸を浮遊させた。  
今度をそれを銃身を横に振ってから、一斉発射させる。

「同じだって！ナナには通じないって！」

ナナオは斥力を使用して、魔力弾丸を寄せ付けない。また、あちらこちらに逸れる。

「？」

しかし、逸れたはずの弾丸は軌道を修正して、ナナオの元へ向かう。

否、ナナオの足に刺さった苦無へと向かった。

「くっ…遅い！」

衝撃と共に、多数の弾丸がナナオの足に当たる。

「……ッ、アアアッ！」

思わず、声が出て、片足が持っていられる感覚のように思えた。

ナナオは、痛みに顔を歪めたまま、ティアナに問う。



「お前、それは」

「あの人”の私物よ。黙って持ってたきちゃった」

ティアナは、またぞろ苦無を持ち出し、自分の顔の前に出し、見せつける。

少し、自慢げに、だ。

「魔力弾及び魔法砲撃誘導術式付与投擲剣『ロビン・フット』。ナオ、これからは逃げられないわよ」

ティアナの言う”あの人”とは、現在ティアナの担当している一件で、やむを得ない状況と事情から行動を共にする事になった『マチン』という女性の事を言っている。

忍びのような身のこなしと実戦的な格闘術を操って近接戦を制しながら、悪食散弾銃と魔導投擲剣を投げ付けて遠距離をしのぎ、魔導士のもとも騎士のもとも違う、トドメの一発を持つ稀に見る人間の事だ。

今回、ティアナは何種類がある投擲剣の内の一つを内緒で拝借していた。

ナオの襲撃を予見しての事だ。

通常、魔力弾丸の誘導制御は魔導士本人で行うケースが高いが、『ロビンフット』は緻密な制御を自動で行ってくれるため、投げた本人は別行動を取る事が出来る。

言っなれば、デバイスによる制御が一つ増えたようなものだ。

「ナナの前で、印の魔法を使うなんて……」

ゆっくりと、ナナオに怒りの表情が出てくる。

「後悔しろよ。ティアナ・ランスター」

空気に緊張感が満ちてきた。

辺りをおおうように。

ティアナは、真剣な面持ちで、次の行動を考える。そして、今までの戦闘が肩慣らし程度に過ぎない事も感じている。

「ここからね。まだ、ナナオは他の刃もドラグ・ウェポンも出していない、何よりも……」

何よりも、Gameランキング7位の実力が伊達ではない故に。

この結末を辿るためには、ここに至る経緯も辿らねばならない。

ナナオが何故次元世界に来たのか、から……。

## 第礼刃・因縁の行方（後書き）

小ネタ劇場

「うう……、ここはどこだ？」

目の前には、一つの部屋と多数の見知らぬ人々。

そして、黒い球体があつた。

「ううん、クロノ君？」

「高町」

状況が分からないでいると……

『あーたらしい、朝が来たあー 希望の朝があー』

そして、黒い球体はガシャガシャと兵器とスーツ（デバイスバリアジャケット）を出す。

「着るのかな？クロノ君……」

「分かんない。でも、着た方がいいんじゃない？」

黒い球体はメッセージを出す。

『てめえらの命はなくなりました。新しい命をどう使おうと私の勝手です。そんなわけで』

「な、んだよ。これ」

「クロノ君。私達死んじゃったのかな？」

「わ、っかんねえよ！」

『てめらは、今からこの方をやつつけて下ちい』

【ジュエル星人】

特技 取り付く　すぐ逃げる

泣き声　ギョーン！ギョーン！

備考、獣臭い。淫獣臭い。虎の威を軽るナンタラ。

高町のアンダーウェアはガ　ツのスーツに……

以上、続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0729s/>

---

魔法少女リリカルなのはVenom - そのための刃 -

2011年10月8日22時00分発行